
あなたはあたしのモノ

ゆきりいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたはあたしのモノ

【Nコード】

N7401P

【作者名】

ゆきりいな

【あらすじ】

お互いの事はまだ知らないありすと晶。
依織や柚羽達と甘い様で苦い学園ラブコメディーが今、この場所
で始まる。

このお話は実話を元にしてますが、一部、フィクションがあります。

すべての始まり（前書き）

第七大阪中学校 吹奏楽部 登場人物

瀬田 ありす（せだ ありす）中1。4月16日生まれ。クラリネット担当。

あだ名 ありす、瀬田、ありちゃん、せっちゃん

仲川 ^{なかがわ} 晶中^{しゅうじゅう}1。9月28日生まれ。トロンボーン担当。

あだ名 晶、仲川、晶ちゃん、仲ちゃん

戸川 ^{とがわ} 依織^{いおり}中1。5月5日生まれ。アルトサックス担当。

あだ名 依織、戸川、いおりん、とがわっち

すべての始まり

あたしは、瀬田あります。

恋している中！。

幸せいっぱいのはずなのに・・・

どうしてなのかな？

こんなにも苦しまなきゃいけないのかな？

どうすれば、あの人と仲良くできるのかな？

ご飯も食べれるのかな？

ふざけあえるのかな？

喋れるのかな？

もう胸が張り裂けそうなくらいがんばったよ。

でも。

あなたは、答えてくれない。

じゃあ、あたしはどうすればいいの？

もう何がなんだか分かんないよ。

ねえねえ、

教えてよ。

あなたの気持ち。

あなたの心の中がしりたいよ。

すべての始まり（後書き）

さて、これからどうなっていくのでしょうか？
次回もお楽しみに！

2つの出会い「1話」

遡る（さかのぼる）事1年前。

ありすは入学をした。同じように、晶も入学をした。

第七大阪中学校の入学式。

ありすは、その時、晶の存在なんてこれっぽっちも知らなかった。
時がすぎ、やがて、部活動の仮入部の期間になった。

ありすは、音楽が好きで吹奏楽部に入ろうと決めていた。

また、晶もピアノを習っていて、音楽が好きだった。

時が経つのも早く、仮入部が終わり、本格的に入部をする事になった。

もちろん2人とも吹奏楽部に入部する。もう、入部届けも出した。

次の日。ありす、晶は正式に入部をした。

そして、初めての部活。

「こんにちはー！」

部長の挨拶に1年は戸惑う。

「こ…こんにちは」

「出席取ります！」

次々に名前が呼ばれていく。

「瀬田さん」

「はっ…はい」

ありすは少し不安そうに返事をした。

全員の出席が終わり、自己紹介の時間になった。

「私は部長の兼田憂奈です！憂先輩って呼んでね」

「副部長の寺沢妃果梨です。妃果梨さんって呼んで下さい。」

「同じく副部長の相澤琉子です」

「じゃあ、1年生自己紹介しようか。こっちからね。」

部長の憂奈がありすを指差した。

「はい！瀬田ありすです。クラリネットをやりたいと思ってます。」
その瞬間。

「おおー！」と奇声が聞こえた。多分、クラリネットの先輩方だろうとありすは思った。

時が経ち、すべての自己紹介が終わった。

「じゃあ、今から楽器を決めるオーディションをします！」

「先生呼んでくるから待ってて」

5分経って、先生が3人やってきた。

「知ってると思うけどこの先生が音楽の先生で吹奏楽部顧問の戸根ゆり先生」

「この先生が指揮を振って下さってる伊丹祐也先生」

「吹奏楽部副顧問の堀雅信先生」

「この先生方に審査をしていただきます！」ありすはクラリネットになれるのか心配になった。

2つの出会い「1話」(後書き)

ありすはクラリネットになれるのでしょうか。

これからどんな部活になっていくのか楽しみにしててください

2つの出会い「2話」

ありすはクラリネットを3人の先生の前で吹いてみた。

いつも、吹いてもあまりいい音は鳴らないが、今、吹いてみると意外と音が鳴る。ありすは本番に強いタイプなんだと本気で思った。

「はい。ありがとうございます。」ゆりがそう言う。

「ありがとうございます！」「ありすもゆりにつられて言う。

次は、トロンボーンの番だった。

晶はトロンボーンが吹きたかった。

「よろしくお願いします」晶が言う。

「どうぞ。」ゆりが答える。

いい音が音楽室に響いた。

「はい。いいよ。」ゆりが答える。

「ありがとうございます…」

晶的にはあまりいい音ではなかったようだ。

「全員のオーディションが終わったので、ここで昼休みにしたいと思います」ゆりが疲れたようなオーラを出しながら、そう言った。

昼休み。

「ありす〜!」

そう呼んできたのは、1年1組で、第七大阪中学校に入って最初に友達になった柚羽だった。

「柚羽！どうしたん？」

「クラリネットどうやった？」

「まあ、なんとか…柚羽はサックスどうなん？」

「ヤバイ。無理かも…こうなったらパーカッションを狙う。でもパーカッションもヤバかったんよ…」

「マジ！？ヤバイやん…どうするー！？」

そうこうしているうちに、オーディションの結果発表が始まった。

2つの出会い「2話」(後書き)

さて、ありすはクラリネットになれるのでしょうか？

また、袖羽も念願のサックスになれるのでしょうか？それとも、折れて、パーカッションになるのでしょうか？

長旅の始まり

「フルート、田中。以上。」いよいよ結果発表が始まった。

「クラリネット…」

「小川、緒田、瀬田。以上。」

ありすは念願のクラリネットになれた。

「サククス…」

「戸川、真樹、弥生。以上。」

柚羽はサククスにはなれなかった。

「トランペット、鯉田。以上。」

「トロンボーン…」

「仲川。以上。」

晶もトロンボーンになれたようだ。

「ホルン、夜灘。以上。」

「ユーフォニウム、穂村。以上。」

「チューバ、詩群。以上。」

「パーカッション…」「香栄。以上。」

やはり、柚羽はパーカッションになった。

「これから、辛い事もあるかも知れんけど、頑張ってね。では、今から決まったパートに分かれて、練習して下さい。」

「はい！」

1年全員が声を揃えて返事をする。

これから、第七大阪中学校吹奏楽部1年の長い旅が始まる。

長旅の始まり（後書き）

あります、晶は念願のパートになれましたが、柚羽はなれませんでした。

一体、これからどんな事が待ち受けているのでしょうか？

恋する瞬間

「じゃあ、べー、吹ける人。」

今日は、1年だけで初めての合奏。裕也が言う。

晶がゆっくり、自身ありげに手を挙げた。

「おっ、名前は？」

「仲川晶です。」

「仲川か。じゃあ、べー吹いてみて。」

晶が吹いた瞬間、ありすは、「なんて綺麗なべーなの。きっと、心が綺麗だからなんだろうなあ」

そう思った。

そして、恋をした。

次の日。

「仲川。ちょっときてくれへん？」

「うん」

晶は「こいつ、誰だろう。」と思いながら、いったら、

「いきなりごめん。誰かわからんよな。あたしは瀬田ありす。よろしくね！で、プロフ書いてくれへん？」

第七大阪中学校吹奏楽部は、プロフ（1）を書くことがブームだった。

「先輩からも3・4枚もらっていたから、1枚位もらったって、あまり変わらないだろう」と思っていた晶は、「分かった。ちよーだ

い
「と
い
つ
て、
受
け
取
っ
た。

恋する瞬間（後書き）

（１）「プロフ」とは？

プロフとは、「プロフィール帳」の略。

ありすは晶にプロフを渡せました。

さて、これからどんな恋が始まるのでしょうか？

あたしの秘密

今日は、あたし・・・いいや。瀬田ありすの秘密を教えます。
あたし、瀬田ありすは、つい最近、仲川晶くんという子に恋をしました。

仲川くんは、綺麗なベーを吹ける超カッコイイ男の子です。

まあ、みんなは、カッコイイなんてこれぼっちも思ったことないかもしれないけど、あたしにとっては、カッコイイ。

みんな、仲川くんをいじって、ただ単におもしろい奴って思ってるかもしれない。

けど、そんないじられてるあなたを見て、「カッコイイって誰も思わないのかなあ」

ってそう思う。

もし、あたしがあなたの事、好きって誰にバレても、ずっとずっと好きでいたい。

それがあたし、瀬田ありすの本心。

最後に。

「この思い、届かないかもしれないけど・・・」

「大好きです。」

あたしの秘密（後書き）

「最後に。」とか言ってますが、最終話ではないですよー（笑）
次話、いよいよ苦しい恋のバトルがはじまるかも・・・

何も知らない世界「1話」

晶は今日もルンルンで入学してはじめてできた侑将と学校へ行った。すると突然…

「おはよう」

と可愛くも頼もしい晶の好みな感じの声でした。

とりあえずおはようと言われたので、

「おはよう」

と返した。

するとその女の子は、「あっ！自己紹介まだやったんやんな」と言い、紙に何か書き出した。

そこには、

「名前：戸川依織　誕生日：5月5日　あだ名：依織、戸川、

いおりん、とがわうち　一言：これからもよろしくね」と書いてあった。

「あなたは…なかがわ…くんやんな？」

「なんで知ってるん？」

「だって…」と言い、名札を指差した。

「あ…！」晶は気付いたようだ。

「ってか、鯉田は？」侑将は、空気の読める奴でもう教室に入っていた。

「ん？まあ、とにかくよろしゅうございます！」

依織は笑いながら教室に入って行った。

「面白くてしつこくなさそうやし、いい奴やなあ」

晶はそう思った。

何も知らない世界「1話」(後書き)

さあ！次はどうなるんでしょうか？
次回もお楽しみに

何も知らない世界「2話」

晶は最近、依織に少し好意を持ち始めた。

晶は気が付けば依織ばかり見ていた：

と言つても、席は前後なのだが。

「それにしても、この席は周りがいいなあ。

最初に友達になった鯉田が斜め前で、戸川の親友の香栄が隣で、俺の：戸川」

なんて浮かれ過ぎてる晶なんだ。作者までアホらしくなってるぞ。自分で書いてるくせにな。

まあまあ…話を戻して。

ついつい顔がにやける。

そんな浮かれている時。

「仲川く？お〜い」

数学の村内先生むらうちが声をかける。

そう。今は授業中なのだ。

「お前、超にやけてるぞ！好きな人の事考えてたんか！」

ドツツと笑いが起こった。晶は依織も笑ってるので、「しまった…」と思った。

「じゃあ、代わりに……戸川。この問題やってくれ。」

「はい」

そう言い、スラスラと意味の解らない（わからない）問題を解いた。

「おっ！さすが戸川！正解！」

晶は、

「戸川ってやっぱ凄い子やったんやあ」

そう関心した。

何も知らない世界「2話」(後書き)

意味の解らないの「解らない」は、わざわざそうしてあるので、決して、ゆきりんごがバカな訳じゃないですよ

作者の本音が本文に出ましたが気にしないで下さい(; _ ;) /

楽しいひととき

「いおりん〜！」

授業終わりに柚羽が声をかける。

「どうしたん？ ゆずは」

「いやいやあ」

「何？」

「仲川っておもしろそうやん！ どうなんどうなん！」

「はあ？ 何がやねん？」

「んもー分かってないなあ！ どう思ってるんよ」

「それはどういう意味ですか？ 柚羽さん？」 依織は大して柚羽をさ
ん呼びしてる訳じゃないが、そういうときはさんを付けるのが依織
だ。

「そういう意味です。」

「別にフツーやろ」

「マジでそう思ってるん？」

「はい。」

「それにしても、仲川の話したらにやけてるぞっ！ このこのお〜！」

「まっ… マジでっつ」 「ええ。つつか動揺してるやん！ おもしろ！」

依織は「そんな事ない」と言い張るが、柚羽は勘が冴えているから、
依織も晶も互いに気にしあっているのは分かっていた。

楽しいひととき(後書き)

依織よゝ！

気付いてくれゝ！

実は鈍感な依織ちゃんでした
次回もお楽しみに^^

あたしへの真実

「なあなあ、ありす！良いこと教えたるか？」

「なあーんか嫌な予感するけど…教えて」

「あんなあ！依織ってな！もしかしたら仲川の事好・き・か・も知れんでー！」

「もー柚羽ったら冗談言わんといてえやあ」「いやいや！うちがさあ、外した事、あるか？」

「うつ…それは…」

確かに、入学式の次の日、柚羽は見事な推理力でコンビ二強盗の犯人を見つけ出し、逮捕させて、警察から感謝状をもらった事があるくらい凄いのだ。

「じゃあ、信じるわ。」

「依織は同じクラスやし、席、前後やから、告る可能性けっこうあるけど、ありすはクラス違うし、唯一の助けが部活…かあ…うちは正直、どっちの味方でもないから、応援しかできんけど…それでも頑張ってみる？」

「そりゃ初めて本気で好きになった人やもん。頑張るよ！」

「そうやで！それぐらいの覚悟でやらんとっ！」

柚羽は本当に依織が勝ってしまうと思っていたが、それでも、「ありすには頑張ってほしい」という気持ちがあった為、そう言う事にした。

あたしへの真実（後書き）

ありすに依織が仲川の事を好きな事を知られちゃいましたねえ…
これからどうなるのか？
お楽しみに^^

恋のテストと勉強のテスト「1話」(前書き)

穂村 実南子
ほむら みなこ

中1。わりかし、キレ症。少し、標準語を交えて喋るのが特徴的。

恋のテストと勉強のテスト「1話」

「うわああ！どーしょーっっ！」ありすには最悪の出来事が起こった様だ。

「どした〜？」

佳莉那がありすに不思議な顔で聞く。

「あっ…明日はっ…てっ…てっ」

「テーストっっ！」

実南子が叫ぶ。

「うわああ〜言わんといてえええ〜」

「えへっ」

「「えへっ」じゃないよおお〜」

「うちもヤバいなあ…」

「まあ、どーになるっしょ！」

そして、ついにテストの日になった。

「よ〜い…始め！」

1時間目は数学。

「え〜と…？この方程式を解け。…あああ〜意味わからん！」

あつという間に時間が過ぎ、数学のテストが終わった。

「実南子はどうやった？」

「意外にできたよ〜！ありすは？」

「全然無理……」

「あらら！でも、次があるさっっ！」

慰めあいながら、テストは終わった。

恋のテストと勉強のテスト「1話」(後書き)

さあ、勉強のテストは終わりましたが、恋のテストは終わってませんねえ……

どうなるんでしょうか!?

次回もお楽しみに

恋のテストと勉強のテスト「2話」

「ああ〜りい〜すう〜つつ！うう〜」

「柚羽〜？どした？」

「どーしょーお！」

「だから何？」

「明日、席替え〜つつ」

「席替えが何？」

「いおりんと離れるう〜つつ」

「いおりんと離れるだけでそんな風になるか？普通？」

柚羽は、大して依織と離れるのが嫌だった訳じゃないがそこから、晶を連想させようと目論んでいたのだった。

「だって、あんなたのしーい席ないぜ？いおりん、仲川、鯉ちゃん。」

「ああ……なるほど。」

ありすは妙に納得してしまった。

「な！な！やろ？」

「まあまあ……」

「じゃあ仲川に告って！」

「はあああ？何で？」

「いやあ！おもしろいじゃん！」

「あつそつ。分かったよ！やればいいんでしょ」

「うんうん！があ〜んば！！」

ありすは柚羽の無理矢理な発言により、告白をする事になった。

恋のテストと勉強のテスト「2話」(後書き)

ありすちゃん告白しますねえ^^

作者も楽しみです^^次回もお楽しみに!!では

決心の時「1話」(前書き)

弥生 やよい 希唯 きゆい

中1。ちよつと、キツいところもあるが、
とてもいい子。

決心の時「1話」

「今日は、ドS（1）な柚羽がお送り致します！テへっ」「テへっ」「って…おいおい…」

「ありすは、私、柚羽の説得により、晶に（あんま晶、晶呼びたくないんだけど、仲川って呼んだら分らない人いるかもしれないからそう呼びますね）告白する事になりました。」

「うゝん…どうしようかなあ」

「何が？」

「ありすが悩んでいるところに希唯きゆが来た。」

「いや、ちよつとね・・・」

「そのちよつとを教えてよ」

「どーしても言わなきゃダメ？」

「いや・・・そう言われたらそうでもないけど・・・さ・・・」

「じゃあ言わん！」

「あゝそゝ。分かった。」

「希唯がいい子で良かった・・・よし！メールで送ろつと」

ありすは、告白の仕方をメールにすることに決めた。

決心の時「1話」(後書き)

次はどんなことが待ち構えているのでしょうか？

次回もお楽しみに^^

(1) ドS・・・とてもいじるのが好き。 反対語はドM。(とて
もいじられるのが好き。)

決心の時「2話」

「これでいいかな」

ありすはこんな内容にしようと考えた。

「宛先」仲川 晶

「件名」瀬田です^^

「添付」なし

「本文」瀬田です。あのさあ、質問やねんけど、仲川って好きな人居ったりする？（笑）こんな質問おかしいかも知れんけど答えてや！何でこんな質問すんねんって？

それは…

仲川が好きやからやで。（恥ずかしっ！）返事聞かして。

瀬田 ありす

「こんなんでいいかなあ…」

何か変な所があつたら大変だから念入りに調べるありす。

「よし。送ろ。」

そう思ったが、やはり告白には勇気がいる。

「ありす〜！？ご飯〜！」「はい」

「あ、今日のご飯ブログに載せよ」

ありすはブログをしていて、佳莉那や柚羽はこの事を知っていた。
というか、その2人もブログをしていた。

「よし。撮れた！あ、あれ…うん？ふえ？あゝ！」

ありすは大失態を起こしていた。

なんと！送ってなかったはずのメールが送信されていた。

「あっああゝ！！やってもた…でもなんで…？」

実は、携帯を開けたままできて、ありすの弟・優喜ゆうきがポチポチとボタンを押していたのだ。

決心の時「2話」(後書き)

あります、告りましたね。はい。
次回もお楽しみに^^

本当の気持ち

遂に晶に告白メールを送ってしまった。ありすは勉強机の前に立ち尽くしたまま、10分は居た。

10経ち、「はあああ〜どーしょ」

と唸りながら（うなりながら）うろちよろし始めた。それから5分。

突然、オーディナリー・マーチの音楽が鳴った。

オーディナリー・マーチは晶だけの着信音だった。

ありすは動揺し過ぎて「誰やる…」

といい始めた。

鳴り終わって、「ちよつと見よかな」といい、携帯を開けた。その受信ボックスの名前に「仲川晶」と書いてあった。

大事なコト（前書き）

瀬田 信宏
せだ のぶひろ

ありますのお父さん。

ありますが小さい時に亡くなっている。

トロンボーン奏者でよく世界を飛んで回っていた。

大事なコト

ありすはドキドキしながら、受信ボックスを開けた。
そうすると、

（送信者）仲川晶

（件名） Re: Re:

（添付）なし

（本文）

瀬田の気持ち、受け取った。
今すぐにはOKできへんから、もうちょっと考えさせて。
ありがとう。

と、あった。

「やっぱ、うちに勝ち目なんてないよな…」

その時、昔、父・信宏のぶひろが言っていた言葉を思い出した。

「ありす？」

「パパ、なあに？」

「もし、ありすに好きな人が出来たら一生懸命に、がむしゃらに頑張って好きになってもらいや。パパ、応援してる」

「うん！頑張る！」

この時は意味も分からず、ただただ頷いていただけだったが、今になって分かったような気がする。

こんなありす自慢のいいお父さんを見れたのはこれが最後だった。ありすは仏壇の前に立ち、お辞儀をした。

「お父さん、ありすは今、一番の頑張り時やと思うよ。お父さん、あの言葉、覚えてる？お父さんとありすが最後にあったあの時…。うち、一生懸命にがむしゃらに頑張る。」

ありすは仏壇の中に、いや、心の中に居るお父さんにそう話しかけ

た。

大事なコト（後書き）

ありすのお父さんはどんな事があつて亡くなったのでしょうか？
次回もお楽しみに（・・・）

お父さん、ありがとう「1話」(前書き)

瀬田 美琴 せだ みこと

ありすのお母さん。

割とおおらかで天然。優しい。

瀬田 凉 せだ すず

ありすの妹。

2歳。

お父さん、ありがとう「1話」

あの日から8年。

今日はお父さんの命日であり、海外出張の日だった。

「美琴^{みこと}、1年帰って来れないんだけどありすと涼^{すず}を守ってやってくれ。」

「あなた、なるべく早く帰って来てね。ありすも涼もあなたの事忘れちゃうわよ!」

「分かった。忘れられないように早く帰ってくるよ。」

「ありす?」

「パパ、なあに?」

「もし、ありすに好きな人が出来たら一生懸命に、がむしやりに頑張って好きになってもらいや。パパ、応援してる」

「うん!頑張る!」

「涼?」

「なにー」

「涼は頼もしいからママとありすの事よろしくね!」

「うん!ぱばもげんきでかえってきてね!」

「うん!」

お父さん、ありがとう「1話」(後書き)

ありす、涼、美琴はお父さんを無事に送る事が出来ました。
さて、これからどうなるんでしょうか？
次回もお楽しみに、

お父さん、ありがとう「2話」

次の日。

「昨日、関西空港から16時発の飛行機が墜落しました。死亡者は瀬田信宏さん、……………重傷者は……………です。」

美琴がたまたまテレビを見ていた。美琴は頭が真っ白になった。

「あの人が……………」

「ママ、どーしたの？」

ありすの手を涼が握って美琴の元にやってきた。

「ううん。何でもないよ」

「涙出てるよ」

「あ……………」

そう言いながら美琴は必死に涙を拭った。

「何があつたの？もしかして、パパの事？ママ、教えてよ」

ありすはすぐに察知した。

「うん。ありすも涼もちゃんと聞いてね。」

「うん」

ありすのしつかりした返答。

「はい」

涼の何も分かっていない（2歳だった為に何も分からなかった。）返答。

「実はね…パパ、いなくなっちゃった…」

「ずっといないじゃん」

涼は真顔で答えた。

「涼、いなくなっちゃったのは……………」

「まって！」

ありすが美琴の発言を止める。

「もういいじゃん！まだ涼だって2歳だよ！今、こんな事、言わなくても後々言えればいいじゃない！もうママの泣いた顔、見たくない

よ！！」

ありすは自然と涙がぼろぼろこぼれた。

「……………ありす……………ありがとう」

そんな涼も10歳。

もうそろそろこの話をしてもいい年頃だ。ありすは5歳であんな風になったのだから、涼も大丈夫だろうと美琴は思った。

お父さん、ありがとう「2話」(後書き)

ついに涼にも言う時期が来ましたね！
このお話を書いていて私も涙が出ました、
次回もお楽しみに

お父さん、ありがとう「3話」

「涼。ちよつと来て」

ありすと涼は、宿題をしていた。

「はい」

美琴は暗い顔をしてた為、ありすはすぐにあの時の事だと思った。

「涼。よく聞いてね。涼がちっちゃいころからパパいなかったよね。」

「うん」

「実はね、パパ、事故で天国にいったんだ…涼はその時2歳だったから覚えてないだろうけどね。」

「ママ。涼、覚えてるよ。パパがいなくなった全ての事。だから、もう言わないで。」

涼はあの時、2歳だったのに覚えていた。

「うん。涼、ありがとう」

こうしてありす・涼・美琴は、新たな人生を歩む事になる。

お父さん、ありがとう」「3話」(後書き)

ありすも涼も昔から大人びてますね…
私はどうやら…(涙)

思い出したあの事

「今日も頑張ろー！」ありすはそんな独り事を言いながら登校していた。

そういえば、まだ、1週間あつたのに、晶からの返答が来ない。

まだ考えているのだろうか？

そう思っているうちに1か月が経った。

まだ、返答は来ない。

もう、この事は忘れているのだろうか？

いつそ、自分も忘れてしまおうとしていた。でも、こんな事、忘れられるはずがない。

「うわっつ！！！遅刻するやん！やばい！」近所のお店の時計を見ると、8時10分だった。

予鈴は8時25分だから後、15分しかない。

ありすの家から20分はかかるから、急いで学校へ向かった。

大変だったあの時

「ふうー…疲れた……」

ありすは部活から帰ってきて、布団の中に入った。
吹奏楽部の割にハードな事をしている学校だから、疲れるのは当たり前だ。

すると、側に置いていた携帯がなった。

オーディナリー・マーチだった。

晶だけの着信音だった。

なんだろうと思いつながら受信ボックスの中を見た。

すぐに目に入ったのが、

「ごめん。」

だった。

こんな事になるのは分かっていたけど、やっぱり辛い。
ありすはずっと立ち尽くしたままだった。

新たな旅立ち

あのフラれた日から早くも1年がたった。

「ありす〜!」

依織が叫びに叫びまくる。

「何ーつつつ?」

「いや……その………」

「なんやねんな!ー!言いたいことあるんやったら言いなさい!」

「やつぱ何も無い!ー!」

「ほんまかあ??嘘つくなよ」

「だいじょうぶい!」

「依織、古い」

「ほんまやな!ー!」

こんなやり取りをしながら、何事もなく

あなたを好きになる前の日々の生活に戻れた。

さらに10年後、ありすは運命の人に、いや、愛すべき人に会うことになる。

END

新たな旅立ち（後書き）

終わりましたね。

というか、私、ゆきりいなな事情があり、
連載ストップしちゃうという……

すいません（ノ＞）

新しく新連載するので見てくださいっっ（*^^*）

では（o・・）（ノ）（）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7401p/>

あなたはあたしのモノ

2011年5月30日21時30分発行